

第3期「まちなみ大学」の第1回講義として、「英国の住宅・住宅地計画」を取り上げます。英国は産業革命で住環境が悪化して以来、人々にとって住みやすい住宅、まちなみとはどういうものなのかといったことを真剣に考え、その中からいろいろな住宅地の計画手法を生み出してきました。いまもその手法が、現代の近代的なデザイン手法、あるいは住宅地の計画手法に息づいており、そのルーツを見るという意味で、「まちなみ大学」の最初期にこの「英国の住宅・住宅地計画」を取り上げるのは意義深いことだと思います。

まず最初は、英国人の居住性ということについて少しだけ触れておきます。

私が住んでいて感じたのは、彼らは建築とかまちなみに対して強い興味を持っていることです。常に自分たちのまちなみを気にしており、とくに伝統的なまちなみが好きなのです。それでもし住宅が建て替わる、あるいはまちなみが変わるような事象があれば、それについてひと言いいたいというような人がいっぱい出てくるわけです。

たとえば、有名なロンドンのシティに建つロイズ保険ビル(1986)ができてきたときも大論議になりました。リチャード・ロジャースがコンペで取ったものですが、その斬新なスタイルに反対する人が何りにいっぱいいて、何度も作説説明をするわけです。結果として、ロジャースは多くの英国人が好むケンブリッジにある古いブレンック教会の例を挙げて、その例にある建物は、それよりも300年以上古いと、私が設計するロイズビルも、300年後にはまちなみの一部となって、素晴らしいものになり得ると、歴史的な事例をあげながら説得したわけです。以前新聞にも書いたことがありますが、ロイズビルは、私が言いたかったのは、伝統を大事にしながら、同時に創造的なものを非常に大事にしている、そういう風情であるということです。ユネスコやパンクファッション、ゼーブルズやローレンス・ストーンズなどは英国から生まれているわけで、新しいものを賞賛に受け止めるところがあるわけですね。面白いなと思うのは、パンクファッションのすごい若手な人たちが暗黒に集っていて、みんながそれを微笑みながら見ていて、安んじて見ている感

じがないのです。そういう態度で英国を見ていくとわかりやすいと思います。

このような背景が英国の住宅や建築計画にも関わってくるのです。まず言えることは、ロンドンのみならず英国全土を見ても、新しい建物を見つけることが難しく、築200年から300年ぐらいの建物がいまだに残っているのです。それを改修しながら使っているわけですが、当然、時代によって使われ方が変わってくるので、それに合わせて内部のプランやインテリアを変えていくということです。それも非常にダイナミックで、道路側のファサードだけを残して裏を全部改修してあるものもよく見かけ、まちなみに対しては注意を払っているのが理解できます。レンガ造りのファサードを残して裏を全部改修するとお金がかかりますがそれでも残すほうを選ぶのです。

古い建物がなぜ残っているかということ、おわりの通りレンガや石の部材造りだから、材料自体が強いことがまずあげられます。もうひとつは先ほど言いましたように古いものほど価値を認める国民性です。イギリス人宅を訪問したときに、何か調子があって、「新しく買われたんですか」と聞くと、懐疑を顯するんですね、あ、しまったと思い、ほかの家具を見つけて、「これ、なかなかいいワヤしてますね、古いでしょう」と言うと、ニコッとするわけです。古いということが褒め言葉なのです。中古のクルマでもかなりの値段で売れますし、ものすごく古いクルマがいまだに走っているという状況があるわけです。

建築許可の厳しさ

それとさらに、建築基準法が非常に厳しいことがあげられます。しかし、基準法が一番の本としてあるのではなく、英国の場合はドイツと違い、「経験主義」で例があるかどうかというのを、気にするのです。

日本の場合、新しい住宅を建てるとすると、まず確認申請を提出し、建築主事が建築基準法と照らし合わせて、OKであれば確認するという形式なのですが、英国の場合はビルディングパーミッション、つまり許可申請なのです。それは、建築家でなくても、隣のおばちゃん、おじさんでも出せます。そして、建築主事が自分の裁量で、許可すると認めてしまうのです。法規というものは基本的に

もう少し外側に行くと、写真3のようなテラスハウスの類があります。ちょうど1920年から30年あたり、すなわち第一次と第二次世界大戦の間に、内外に向けて開発業者が住宅地を、案外に売って建てていった住宅です。これを集約住宅地というように呼んでいます。

「集約住宅地」と言われてもびんときないと思いますが、産業革命も初期にロンドンに人が集中して実態も住宅が増えました。なかには探さず、道端が全開にならないような、商業した労働者の住宅がたくさんできましたが、これは増地と真逆なので、まじめと探さず、道端が取れるような住宅を建てれば、収容もなくなるのではないかとということで、新しい事例が各都市にできました。その事例というのが、道路の幅と、高層、狭路、そして高層の長さのルールでした。デザインに関しては何も言っていないので、統一感はありませんが、やや地味なイメージになります。ロンドンの中心から20kmあたり30kmあたりにこのようなまちなみが見受けられます。



写真3 テラスハウスの一例。1920～30年代のロンドン、セントラル

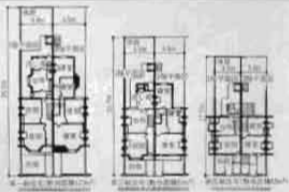


写真4 集約住宅地の一例。セントラルロンドン（1920年代）

多くの集約住宅地は狭路のようなデザインです。スリットを入るとリゼンダがあり、ずっと奥に行くとダイニングがある。そのダイニングから庭が見える。そして庭はとがると狭路があって、子供部屋があるというようなパターンです。そして庭には多くの場合、浴室がついています。

中を見てもみましょう。写真4は奥が庭しいたテラスハウスの内部ですが、手前がリゼンダで奥がダイニングです。そしてダイニングの向こうには庭がある。これは、ダイニングとリゼンダがつながっているタイプでスロータイプと呼びます。スローというのは庭まであるということです。分かれているタイプはセパレートタイプといって、リゼンダとダイニングが分かれています。このタイプは昔のもの。または築年が大きい住宅によって見られます。

写真は右側ですが、右側の多くは庭に面しています。理由は利便性をしなから庭で遊ぶ



写真4 リゼンダとダイニングを共有、奥が庭とスロータイプと称す



写真5 庭が見える位置にキッチンが配置されている



写真6 築年が古いテラスハウスの内部、奥が分かれているタイプ



写真7 フラットタイプの集合住宅、1960年代（写真はストフィンズにて、ロンドン）



写真8 中層の集合スウェーデンとなっている

子供の面倒を見られるということ、家でパーベキューなどをしたときに煙が出ます。リビングには煙炉があります。といっても火は使っていません。産業革命によって空気が悪くなり、一切、煙炉を使ってはだめだという法律ができたのです。したがって、いま残っているのはすべてただの形だけです。燃やせるような煙炉もありますが、真鍮の無煙炭しか使えません。しかしながら英国人は煙炉自体が好きですから、現在ではそこに電気ヒーターを入れたり、あるいは照明器具を入れて飾り物にしています。

写真6は浴室ですが、ベイウインドウになっています。ベイウインドウは、できるかぎりたくさんのお日差しを中に入れたいという要求から生まれたものですが、北側のベイウインドウでもかなりのお日差しが得られます。鏡が白い洞のひとつの工夫というわけです。

写真7、8の2枚は、フラットタイプの住宅です。これは、1960年代に建てられた建物ですから、もうすでに40年ちかく経っているわけです。レンガ造りに勾配屋根ということ、まんなみに合わせているわけです。ここに私は2年ほど住んでいましたが、多くのフラットの住宅はコの字型をしていて、中に共用の庭を設けています。春から夏にかけては、ご老人がベンチを出してひなたぼっこをしている



写真9 リビング、家具はすべて揃っている



写真10 流しカウンターの下の収納、お掃除が楽々している

という姿も見受けられます。

内部を見てみましょう(写真9)。ソファ、テーブル、ベッドなど家具がありますが、通常英国の賃貸のフラット、あるいは賃貸の家はファーニッシュドといって、すべて家具付きです。したがって、借りるほうにとっては、引っ越しするのが非常に楽です。お皿もナイフ、フォーク、フライパン等の食器もついているので、自分で持っていくものは殆どはいりません。しかし最初に、インベントリーチェックというリストがあって、フォークが何本、ナイフが何本と、全部揃え付けのものをチェックする必要があります。もし出るときにフォークが日本でも少なければ、その分お金を払うということになります。

バスルームは、バスとトイレ、洗面というのは一つの部屋になっているタイプです。興味深いのは、寒い国ですからトイレのすにビントのカーペットが敷かれていました。バスのほうは、当然ながらそこでお湯を熱め、バブルバスを入れて風呂桶の中で体を洗う。そして、お湯を流したあとシャワーで石鹸を落とす、出るという方式です。そうすると、家族4人いたら4回、お湯を満タンにするのかと、不思議に思っていたのですが、ある人に聞いてみると、英国人はほとんどがシャワーを利用し、風呂に入るのは月に1度か、2度



写真11 2戸が1建物になっているセミデタッチドハウス。1900～20年代「ウィリアムズ・ロード」, ロンドン



写真12 1棟建てのセミデタッチドハウス「アイズレイブ」, ロンドン

らしいんです。

写真10は右側の写真ですが、丸いツタがあるのは洗濯機。洗濯機は埋入型のタイプでキッチンカウンターの下に納まっているのが多い。乾草機も埋入が多い。私が使ったものは背が高くて悪かった。ジャマを入れたとき、乾草機なんかは20分くらい回ってますし、そして出してみると穴があいていたというのが結構ありました。ですから私はあまり乾草機は使いませんでした。

次の写真は半屋で1軒家のタイプ、そして写真12は1階建てのセミデタッチですが、セミデタッチという2戸がひとつの建物になっているタイプが、なぜ印象に多いのか、不思議に思っていました。ある建築家に関してみると、どうやら真ん中に壁があって、その壁を共有できるという意味でコストパフォーマンスがよいのが理由のひとつ。それともうひとつは、1軒の建物だとせいぜい150から200坪なので、ボリュームとしてそんなに大きくはならない。ですから2軒を1軒にすれば、ある程度ボリュームができるので、建物として、まちなみとして感じがよいというふうに、言っていました。



写真13 丸いツタを付けたアンソニー・ワイルド、1908年

次に、住宅地計画という点で重要な、ハーワードの田園都市構想を比べてみます。

田園には高がった建物がたらず、地面を見ていただくとおそろくすぐでわかると思いますが、真っ直ぐな道路はローマン道路といってローマ人がつくった道路で、それはいつか壊っていますが、それ以外の道路はほとんどが曲がっています。これは中世のまちなみにおける曲がった道路を受け継いでいるからです。そこには高ち着きと心地よさがあるのです。

エベネザー・ハーワードの考えた田園都市構想というものがあります。ハーワードは建築家ではなく、社会学者あるいは哲学者ともいえる人です。彼は、都市には自然がないが、仕事がある。一方、田舎のほうは、仕事はないけれども、楽や田舎があり、自然豊かな所で暮らすことができる。その両方の良さを兼ね備えた「都市と農村の中間」ともいえるべき田園地を考えていく必要があると唱えたわけですが、彼は1908年に『明日の田園都市』という本を書いたのですが、これが非常に衝撃的で、世界の住宅地計画に影響を与えました。世界中あらゆる所で、田園都市つまり「ガーデンシティ」という街があります。日本でも田園調布があり、シンガポールや東洋でもいろいろある所にガーデンシティが受け継がれます。

彼自身は建築家ではないので、具体的なデザインの話はしていません。実際に設計に関わったのは、レイモンド・アンウィンとペリー・パーカーという建築家です。特にアンウィンが担当しました(図2)。彼はハーワードのアイデアを具現化して、実際に住宅地を設計することによって、その考えのよさが理解できるのではないかと考えました。最初にアンウィンは、何をしたかということ、まず彼が非常に好きだった中世のまちなみを調べてみたの



写真14 田園都市の街並み「ウィリアムズ・ロード」

です。英国の中世のまち、たとえばカーズイ
村という、16世紀につくられた村があるの
ですが、そのなかからさまざまなデザイン概念
を抽出・抽出したのです。写真13を見てもお
わかりでしょう。道路がのりやかに曲がって
いますね。また彼はドイツの中世の住宅地も
調査して、専ら向きと変化のある住宅地のデ
ザイン・コンセプトを整理しました(図11)。

たとえば、共同地をつくるとか、中心性を
活かすとか、あるいは住宅地はロードサイド
にあるとか、道路は曲げるとか、曲がった道
の間に空間とか、あるいはさまざまなサイズ
の住宅による不規則性、所々に設けたオーブ
ンな共同空間、教会や公共施設によるまちの
中心性などの要素を抽出したのです。

家の方向は、こっち向いたりあっち向いた
りしてまわね、1階建てがあつたり2階建てが
あつたり、そして、道路住宅があつたり、あ
るいは、道先に穴が開けていたり、前庭があ
つたり、非常に進化に富んでいます。これら
を彼自身は設計のデザイン・コンセプトとし
て設計に活かしたのです。それと、彼自身
が、非常に熱心だったのは、アンウォン・パ
ークと言われているのが、新興住宅地にあるよ
うな、真っ直ぐに戸建やササユスのウチを並べ
るのではなくて、道中にコモン・ガーデン、
つまり共有の庭を設けて、そして向きを曲む
ように住宅を配するアイデアです。

いわゆる住宅地計画のアクセスがここに
あるわけですが、これらは、いまの住宅地の
設計において使われている手続です。これが
旧制度の終わりにすでに考えられていたの
ですから、驚きです。アメリカのロード・パー
ンシステムにもこのやり方が用いられており、
現在でも学ぶべき点が多々あります。

我が国に関わったのがレッドワースとい
うニュータウンです。コモン・ガーデンを住宅
ですと興んでいきます(写真14)。プランを見
てもおわかりのとおり(図12)、住宅は出たり
入ったりしています。同時に、テラスハウス
があつたり、戸建てがあつたりといふような
ことで、進化に富んだ、さまざまなタイプの
住宅が並べられています。そして、道路も、
真っ直ぐの道路を設ける場合は必ず、道路の
エンドにはアイストロップとしての建物を配す
ということも彼は行ったのです。

次に我が設計したのは、ハムステッド・ガー
デンサブurbです。住宅地のデザインや道路
形態は既述したに当たっているのがわかると思

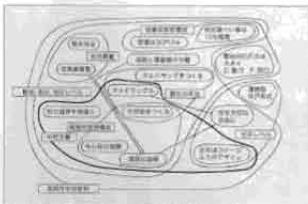


図11 アンウォン・パークの住宅地計画のデザイン・コンセプトの整理と結果 (出典1)



写真14 レッドワースのニュータウン、コモン・ガ
ーデンを住宅が取り囲んでいる。



図12 レッドワースの住宅地のニュータウン計画 (出典2)

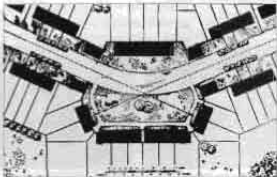


図13 街角の建物が中心にあり、道路を曲げるように住宅を配している (出典1)



写真17 西ロンドンにあるグリーンパーティの本部ビルディング



写真18 各都市を結ぶのはグリーンパーティの頭脳ネットワーク

います。現状に広がっているということは、当然ながら中心性があるわけです。その中心性の部分には、教会、あるいはシナイホールというような、まちの中心的な建物を活用しています。そして、あとは駅前道路を削るか、あるいは曲がった道をつないでいくということをおこなったのです。道路の曲がった所には、従前のようにサイドストリップとして住宅を配置するのです。また、彼は住宅地の人口に大きなゲートをおきようと思いはやめたのですが、ゲートよりはむしろ住宅を建てて、住宅地自体をゲートに代わろうということでおこなった建物は、この住宅地の元にはなりました。また、住宅地の中心には教会と市庁舎センターがあります。

結局いろいろな形勢の人たちが一緒に住むというアイデアだったのですが、なにぶん環境が大変よく、私もできれば想定の外にハムステッド・ガーデンサブに住みたいと思いは結構なもので、いまはもうお金を持っている人しか住めなくなりました。そのへんは、ハウスの理念とはちょっと乖離してしまっている状況です。

都市を結ぶグリーンベルト

次に全国のことを広げてお話をいたします。ロンドンをはじめソントチェスター、リバプール、バーミンガム、ブリストルなど、グリーンベルトが各都市を囲んでいるのです(図19)。グリーンベルトというのは、都市がある場所とはならないようにしている禁止帯なのです。このまわりにのびのびの建物がはびかるよということ、お隣の都市のサイズを出ておき、その周りを公園で囲んでいます。緑を供給するというものもありますが、同時に、ずるずると都市が膨張しないようにしているのです。日本の場合を考えてみると、横浜、東京、千葉がずるずるとつながっており、区切りがありません。けれども、そういうことは英国にはなく、一律必ず都市の区切りとしてのグリーンベルトを造り次のまちに行くといい構成になっています。その間がグリーンベルトを造ると、田舎の風景がずらっと広がります。そして、広がりの中にボツボツと農家がぽつぽつと見えます。



写真19 田舎の中心に建つ民家の写真 [ドーセット]



写真20 ハムステッドにはスターの邸宅(ハムステッド)が置かれていた



写真21 ハムステッドにはコンクリートとレンガという組み合わせの建物が置かれていた

写真3枚の敷地は、私の友人の家ですが、敷地の中に池があって、その池で魚を釣かべて楽しむほど大きな敷地です。邸内は、もちろんリビングとリビング、あるいは北庭と南庭という2つのレイアウトともいえます(写真1)。そして邸内の前にはベンチがあって、ほろほろととんさんのアトモープがはけてありまわ(写真2)。従前はこれをランサーパトリーと呼んでいました。扉を開けてみると、温室や倉庫という印象です。これはどうやら自然や緑、光も触れ享受できるような場所という意味でランサーパトリーなんでしょう。丈夫なだけでなく、必ずこのうらた庭園(サンルーム)のような場所が用意されています。



写真2 池の上でアトモープのあそび場

くると必ず力を発揮して、物を寄付したり何かの運動をして、社会に還元してきたのです。ですから、当館建設で活動が何らかの影響力をして、現場として地盤を試みるかという点での問題が生じてきたかもしれません。

写真1はハムリッドロードという公園です。周辺空間のデザインの特徴としては、自然の形をできるかぎり生かしていきこうとするもので、これはフランスの造園学的なデザインとはまったく対照的な考えです。池があるばあいをそのまま池として使い、石があれば石として残そうじゃないかという考え方です。このハムリッドロードには、民間財があります。それは財団、この土地を所有していた動物の家だったからなんです。つまりこの土地も民間の地だったからなんです。それを公園として寄付したのです。土地は多くの人が知能に救済に行きます。ただ園芸だけをしていける人も多いです。あるいはサッカーをしたり、お弁当を持ってきて食事をしたり、一本を認めたりして過ごします。したがって敷地はほとんどわからず、再興がとれるまいやうなわけです。



写真3 池の周囲公園

さらに近心の川にも見、公園がもっとあると思います。私はロンドンに行って一番訪ねたのは公園の多いことでした。なぜかといいますが、当時、息子が4歳と2歳だったのですが、公園がそこらじゅうにあるので抱っこしていけば、放し飼いにできるのです。どこを歩いても安全なので親戚にありかたかった。

なぜみんな公園が多いのかというと、もともと目録が残っていた土地が、ある程度に多く公園として管理されたからなんです。それきっかけは、日記記事にバチバチと、この土地が民間財団の支配下に知して、敷地が行った社会改良団体です。敷地の運動が民間財団の心に通じ、土地を公園として国や地方自治体に寄付していきました。

また、ナショナルトラストに寄付する機会もあります。ナショナルとは付いていますが、国がつくったトラストではありません。これは、あくまで民間の団体で、寄付団体なんです。そこに土地を寄付すると、基本的に緑が残され、それが住宅地になるということはありませぬ。

みなさんご存じかと思いますが、海軍というおはる民間財団が、一校もつかった財団です。オックスフォード大学系があり、これはまさに民間財団で敷地が有る正体が使われてしまっている。民間ではさういふようなものがなくなったように民間財団は、一校もなかった。いまはあっても空や引込が残っています。それはよくわかりますが、民間の財団というものは、民間財団という、社会の状況が違くなって



写真4 池の周囲公園

次に緑の活に展開して、「海軍の村」というのはいいアイデアだろうという説があります。公園とバグと敷地の二つは村の根本要素です。バグというのは庭園のふとですが、民間の財団の村を見ても、必ず財団の中心に公園、敷地、そしてバグがあります。そしてその周りには住宅地が建ちまわってかかっています。これは、アムステルダムで旅行をしているときに、とても目に当たります。なぜかと言うと、遠くには、敷地の外観が見えるとそこに村があるやうなわけなんです。そしてさらに近づいていくと、住宅地を通り、一瞬だけ公園があり、その外には敷地があります。そして必ずバグ

がありますから、そこに行って朝食をとることができ、つまりお腹が減って、眠が覚くと、教会を探せばおのずとパパが見つかり、食事にありつけるわけです。

現代の若い建築家が新しい住宅地の設計をするときにも、この村の3要素を使います。ダーバン&ダークは住宅地、集合住宅の設計が得意な建築家ですが、リリントンガーデンズの住宅設計コンペのときに、彼はこの教会とパパと公園というのをセットにして提案し、見事に勝ったのです(写真20)。そのへんは、非常にわかりやすい英国らしいコンセプトだなあと感じました。



写真20 リリントンガーデンズ最初の住宅。1階にはパパが設けられている。

写真21 バンダリーストリート住宅地の中心に位置する公園広場

公共住宅の建設

公共住宅の状況についても触れておきます。

ロンドンには、LCC(The London County Council, 1888-1965)、その後のGLC(Greater London Council, 1965-1986)というのがありました。これは、東京都でいえば住宅局に該当する部署ですが、ロンドンの場合はそこが実際に住宅を設計・建設してきました。まあ、公団的な役割をも持っていたわけです。サッチャー政権の登場によって1986年に解体されました。LCCやGLCは、若い建築家にとってあこがれの職場でした。学校を卒業すると、まずはGLCを受験する。そこにいけば、腕をふるって住宅の設計が実際にできるのです。さきほど、古い建物がたくさんあって新しい建物の設計に腕をふるう機会が少ないといいましたが、GLCにさえ入れば、新しい公共住宅の設計ができたのです。

図7、写真21は、GLCの最初の大規模再開発のプロジェクトでバンダリーストリート計画といいます。真ん中に公園を設けて、そこから放射状に道路を配置してあります。これはいまでも保存の状態がよくて、まちなみも

まちなみ大学(第3期) 調査録1



図7 バンダリーストリート計画(出典5)



図8 エルバンク計画(出典5)

図7 バンダリーストリート計画(出典5)



写真21 バンダリーストリート住宅地の中心に位置する公園広場

写真22 エルバンクの集合住宅。レンガ壁のアデザインが美しい

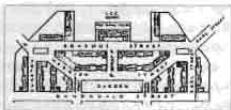


図8 エルバンク計画(出典5)



写真22 エルバンクの集合住宅。レンガ壁のアデザインが美しい

高層にいいです。

よりパンク芸術も、目標に真ん中にコモンゾーンを設けて、放射状に道路を配置しています。同系、写真22の建物は、現在のビルパンクの建物ですが、これを見ても非常に質が高い。ロングのアイデアを見ても、芸術的にも素晴らしい。質の高いデザインは、あとになってむしろと嫌って行くものです。

また、もうひとつ注目しておきたいことは、高層化に禁止符を打ったということです。高層住宅を建てるときにもろもろ鉄筋コンクリートを使いますが、同時に工業製品のプレファブササケーションとしてあらかじめパーツをつくって置き、数層下地にパネルを壁として用いていく工法があり、そういった工業製品でつくった高層ビルが1950～60年代にたくさん建てられました。

本来の住宅の姿というのは高層住宅だと言う人もいました。築き直し同じものを生産することで建築品によって簡単に質の高いものを建てていくというのが、これからの建築なんだということで、高層住宅がどんどん建てていきました。しかし、これに対してさまざまな反対意見が出てきました。一応、高層住宅は地震から懸念することの自然的不安を覚えた。あるいは、上の階に行くのにたいへんだと歩道を渡る住民もたくさん出てきました。もっとも外国人というのは、高層ビルはあまり好きではあきません。これははっきりしています。というのはマンションでも、日本では上層のほうが値段が高いですが、向こうでは一階のほうが高いのです。つまり地面に近いほうがいいということなのです。

これに併せて、上のほうに住んでいると赤ちゃんのおむつが落ちるのが悪いとか、歩道がすのこが悪いとか、そういうことが言われはじめたのです。何かしら高層住宅について新聞などメディアが取り上げていた時期に、「ボーンボイント」という高層住宅団地でガス爆発事故が900人が亡くなって発生まででした。これを機に、もう高層住宅はやめようじゃないかということになったのです。それで1965年以後、実際の公共住宅は結構で、高層タイプの住宅に移行したのです。つまり、3～4階建てくらいで、多くの住人が入る込みつつ、テラスなど外部空間をうまく設けながら、築直しを繰り返していくというタイプの設計が増えていきました。これが公共住宅の一つの特徴となっています。



写真22 北に広がるアレキサンドリアのロードサイド住宅（1970年撮影）

しかし、高層住宅は売客ももろもろ聞いていますが、ガス爆発事故が原因で輸出が減少、結果として低層住宅が高層住宅に残り、あるいは安いので、そこに入るということになり、行なわれるようになりました。そしてパンクリズムによるスラム化が、かなり問題になりました。これは高層住宅ということなのですが、ちょっと別れまして住宅がロシアにはいくつかあります。それは、多くの場合、工業化住宅で高層住宅です。いまは役所ではそれとどうにか手打でましよう、高層住宅や高層などさまざまな工夫が行なわれています。それが公共住宅の現在の状況です。

やがて、写真23が手掛けたのは高層の高層度住宅で、写真23はアレキサンドリアの住宅(1970)です。これは18歳からスクールで教えていた川上三郎氏もこのプロジェクトに関わっていました。真ん中に歩道を設けて、この歩道もゆるやかに曲がっています。その両側に、歩道を設けて駐車庫を設ける。歩道分断をして、建物はメゾネットで、3階にしてさまざまなタイプの住宅が入り込んでいる、非常にデザイン的にもすぐれています。



ロシアにおける新しい住宅開発。基本計画の設計としては、ドックランドのプロジェクトがあります。これは、ロシアの東方20～30kmのあたりですが、ここには、長たきんのドックがありました。やがて使われなくなったドックを再開発して、新しい高層、オフィス型をつくらうという計画がサッチャー政権の意向で進められ、いまも開発が促されています。これは、いい部分と悪い部分も両方あるんだ、非常に面白い部分です。

だと、どこに建っているマンションも同じようなプランになって面白くないというような悩みが出てきたわけです。どうにかもっと創発的なマンションに住みたい、あるいは自分の意思したプランのなかで住みたいという人が増えてきて、それなら何人かが協力して、土地を手立てし、建築費を減らして、建築家と話し合いながら集合住宅をつくっていくというのがコーポラティブ方式です。

しかし、英国の場合は民間は極めて少ない、ほとんどないに等しく、むしろ自営住宅の形のなかでコーポラティブ方式が採用されてきました。その理由も、いろいろなプロセスを伴ったプランを供給しようというのが目的ではなく、むしろローコストで低所得者でも入れるようにするためにコーポラティブが生まれたからです。世帯所得者が住む不況地域の再開発では、そこに住んでいた人たも一戸別な住宅に移っていたとき、建築費にまた戻すという手法のなかでコーポラティブが発展してきたのです。つまり、英国の場合には分売住宅主導、そして、分譲ではなくて賃貸というのが、その特徴です。

写真28はコーポラティブ住宅の写真ですが、2人はコープの委員長とその息子さんと、彼らは賃貸のコーポラティブに住んでいます。そして、みんなで協力して、共同のコミュニティセンターや庭を、どのようにしたらいいか、あるいは、五層りやパーチャーのプログラムをどのようにしたらいいかというようにことを相談しながら運営しています。

写真29は、リパールのウェルウェストロードコーポラティブですが、もともとはスラム化した住宅地があって、一戸別の人たもを、プレハブの住宅に移し、そこで何人も、必要な人が住む住宅はどうしたらいいかというディスカッションを建築家と共に行ない、でき上がったのがこのコーポラティブハウスなのです。

コーポラティブには、改修のコーポラティブもあります。古い集合住宅に住んでいる場合、子供が大きくなって、部屋がたかさん必要になってくる。ベランダも欲しい、設備も悪くなってくる。そのような要求が次々交差する時に、皆で話し合っ、どのように改修したらいいかを決めて役所に申請して、改修を行なうという私たちのコーポラティブです。ここでは、建築としてベランダをつけ、設備を新しく、そして建物の外装をつく



写真28 英国のコーポラティブ住宅の内部で、コープの委員長とその息子さんと、彼らは賃貸のコーポラティブに住んでいます。



写真29 リパールのウェルウェストロードコーポラティブは、もともとはスラム化した住宅地が、プレハブの住宅に移し、そこで何人も、必要な人が住む住宅を建築家と共に行ない、でき上がったのがこのコーポラティブハウスです。



写真30 改修されたコーポラティブ住宅の外観。



写真31 コープの委員がコーポラティブの改修作業を行っている様子。



写真32 改修されたコーポラティブ住宅の内部の様子。



写真32 玄関前に設置されたリフト



写真34 公道通路の段差にリフトを設置して段差アプローチを設けた建物



写真35 ドアまでの段差、車道のカーブはエレベーター



写真36 公道と車道の間の低下は緩やかである（モルテンションズ）



写真37 スロープと土手デザインにした段差作り（アム、ロンドン）



写真38 街の中心は歩行者天国になっている（パーキング＆カフェ）



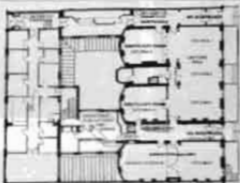
写真39 ショッピングセンターの入口、オートドアのボタンは車椅子の人が押しやすいよう設置されている（モルテンションズ）



写真40 ネットショップの店にも車椅子を止めて高くバーが設けられている（モルテンションズ）



写真41 ヤムズ通りの歩道橋上部分、スロープが階段に準拠されている（ロンドン）



AA School Floor Plan

図17 AAスクール、1947年建築設計図（建築家）

AAスクールにおける建築教育

歴史に、先が学生として、また教師として過ごしたAAスクールは、非常にユニークな建築教育を行っているところなので、簡単に紹介したいと思います。

AAスクールは1847年にてきた学校であり、英国最大の建築学校で多くの有名建築家がここを卒業しています。インディペンデント校で、干渉を嫌って固がるの建築は一切受けていません。

学校の建物は、もともとはジョージアンの住宅で、中に入るとコートハウスになっています。右側の方に講義室があり、左側に研究室があるのですが、これはユニットと呼んでいます。このユニットが学内にくっつくもあり、先生はそのユニットのプログラムを1年間任されて進捗するわけです。

写真42はバーです。学校の居人中にバーがあるのです。この学校は建築家のサロンから生まれの学校であり、そのサロンにあるバーが学校の中心にあって、その周りに教室があるわけです。したがって昼間からみんなビール飲んだりワインを飲んだりという状況が見



写真42 バーが学校の中心に設置している（AAスクール、ロンドン）

受けられます。

そして写真43のような工図があります。これはAAスクールだけでなく、ロンドン大学や他の建築学部も必ずこういって図があるんです。本を切ったり紙を裁断したり、型紙をつくったり、概念スケッチをつくったり、実際に手を使いながらものをつくって、そして最後にそれを図面に落とすという順番でプロセスをやるわけです。

最初にユニットの先生は、私は1年間をこのようなプログラムでやります。そして、ユニットの旅行についてはバーに行きます、というようにことを進めます。学生のほうは、第1〜3年まで、自分の入りたいユニットを申請します。インディペンデントを望むのです。学生は、AAサイズでいたいという図を描く。そのポートフォリオは図面を持ってきます。先生がそれを見て、お前はOKだとなると、このユニットの学生になるわけです。

授業は多くの場合、チュートリアルを言いまして、学生と先生との個別指導で進められます（写真44）。また、エグゼクティブセミナーというのが、週に二回くらいあります。ロンドンに限らず、建築家が実際に立ち寄りやすい場所ですから、世界中の有名建築家が来て、講演をしています。これはオープンで、AAスクールの学生だけでなく、当からも多くの人が聞きに来ます。

そして最終の試験というのは、作品を一つずつ、ユニットの先生が評価をして決めるのですが、このときに自分の先生が学生の作品を他の先生に説明します。それはなぜかという点、その先生は自分の学生の作品に責任を持つということ。逆に言うと、もし目の前のユニットの学生が選んでも選んでもなかったらその先生は次の年までになってしまっても責任がありません。やりたいという自分のユニットが毎年入れ替わっています。日本の大学とはずいぶん違います。

それではプログラムを一通り紹介したいと思います。



写真43 ワークショップ（左側）は多くの建築家やデザイナーが訪れる（AAスクール、ロンドン）

います。

この課題は、「朝8時半にはバザールスタート・ステーションに行って、美人を見つけ、尾行しなさい。そして、その人と都市との関係を考えなさい。対象10人は尾行しなさい。もし気づかれたら、その時点で尾行はストップしなさい」という内容でした。そこには、何をデザインしろとか一切書いていませんでした。私は非常にとまどったんですが、やるざるを得ないので次の日から尾行をスタートしました。

何人も尾行調査するなかで、先生は聖徳大学の女子生の尾行調査が面白い、学内での彼女の生活も調査しなさいと言われたのです。それでその日から再び彼女を車で待ちました。ようやく1週間後に関われて、再び彼女を尾行し聖徳大学の中に入ってその1日の様子をスケッチしたのです。なんだかんだしながら結局私のプロジェクトは、自分の体と服との間の空間を探索するようなものになりました(写真45)。これは、私的なものと公的なものの間のスペースの探索につながるという意味からです。

次に、2学期に入ると今度はタクシーのプロジェクトに移りました。これは、「ある駅か駅の周辺で、自分の興味のあるものを見つけなさい」という課題でした。私が興味を持ったのは、たまたまタクシーだったので、ドライバーの1日の生活とか、あるいはタクシーの構造自体を調査しました(写真46)。すると先生はほうから、「そんなことやっても意味

はない、もっと1分の1で考える必要がある。タクシーを買いなさい」と言われました。しかしタクシーを買いなんてちょっとでござせんから、タクシーの扉を買いました。結局、本物を大切にするという意識が強いのです。

それで、タクシーの窓を通じてのいろいろな行為をスケッチしました(写真47)。ロンドンのいろいろな場所を持って行って、その扉を顔縁にして、さまざまな景色を撮りました。最後には慣れましたが、初めは恥ずかしいものでした。そして、タクシーに関わる、空想やホテルなどを調査して、ドローイングを積みました。

そのあとで、ホテルの設計をしたのですがそれだけでは面白くないと言われるわけです。そこで、写真48のようなタクシーの扉を開けて、そして、入るスケールの入口を見たときに、そこにトビラが置いてあるというようなドローイングを描いたのですが、これを先生が気に入り、「これはパフォーマンスだな」ということで、私のプロジェクトはパフォーマンスのデザインになっていきました。

扉のキャストをつくりスクリーンに見立てました。そして扉とフレームで構成したタクシーの配付セグメントを組み立てて、逆にそれを経験させるかということで、チャールズ皇太子にしました(写真49)。といっても偽物チャールズ皇太子は、1週間当たり2万円で見ましたから4万円払いました。ダイアナ妃のソックリさんより安かった。このアイデアは、偽物のプリンス・チャールズが、本物のタク



写真44 授業は主にキュートソファ(無人登場)で決まるとして授業。中央がセグメント・プライス教員、右が学生。



写真45 もの身体とホテルとの空間を表現したドローイング。



写真46 タクシーに関わる様々な調査をまとめたドローイング。



写真47 タクシーの窓に穿つ様々な行為のドローイング。



写真43 AAスクールで実際にプロトタイプを製作しているメンバーのスタッフ



写真44 多くの参加者も参加者で参加し、参加の目的は異なるが、全員がアクティビティに参加

ローでやって来て、私のつくった動物のタワーを体験するというコンセプトです。

ここにはさまざまな建築のポストアラビヤが隠されています。たとえば、二次元の前面フレームがありますが、タワーの2枚の扉を開くことによって、三次元になりますね。そして、そこにはいろいろな、レバーとか、シート金具とか、スイッチとか、そういうものが使われていますね。ですから部分と全体の関係があります。つまり、パフォーマンスとはいえ、建築的プロジェクトなのです。

彼者がいろいろ楽しみましたが、学校閉校のときに、ある人がAAスクールにやってきます。10分前に、だれが来るかというのを発表します。みなさん、空ご期待というようなことを発表するのです。そして10分前に「プリンス・チャールズがやってきます」と校内放送したので、みんながワーッとやってきて写真のような状態になったのです。そして私がそのプリンス・チャールズを校内に案内するのですが、ある人は驚き、ある人はニヤニヤしていました。

建物だけを設計するという捉え方ではなくて、パフォーマンスあるいは料理、音楽なども建築であるとAAスクールでは幅広く捉え

ています。

このほかにも私が助手をしていたときにも、さまざまな面白いプロジェクトがありました。このユニークな学校は、建築の知識を単に教えるというよりは、むしろ各自の創造性を開拓するということを大切にしている学校であると感じました。

建築家「アダム・ワット」の住宅設計事務所、内田建築、建築雑誌「現代建築」の編集長、スーパー、建築雑誌「現代建築」の編集長「International Classic Type of Planning in Practice」

1999
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン

住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン
住所：「イギリス」の国、ロンドン、ロンドン